26L-am09

インスリン治療中の患者におけるインスリン抗体の変動と血糖コントロールについて

○重野　牧[1], 永松　静香[1], 工藤　雅美[1], 平賀　正治[1], 小寺　隆[2], 鎗水　浩治[1]
（[1]中村病院, [2]佐伯中央病院）

【目的】ヒトインスリンが使用されるようになり、外因的に投与されたインスリンに対するインスリン抗体の出現率は低下してきている。しかし、現在でもインスリン療法を受けている患者の 10～30％で臨床的に問題となりうるインスリン抗体の出現を認めることが知られている。今回、インスリン自己注射によりインスリン抗体ができたことが血糖不安定の主な原因と考えられた患者について検討した。

【対象と方法】インスリン抗体により血糖不安定の主な原因と考えられた患者 14 例を対象とした。インスリン抗体量、インスリン投与量、HbA1c、低血糖の頻度について検討した。

【結果】インスリン製剤間の差、インスリン抗体とインスリン投与量との明らかな関係はみられなかった。低血糖の多い患者ではインスリン抗体が多くみられ、また HbA1c が高い傾向にあった。

【考察】インスリンアレルギーを呈した症例もあるため、インスリン使用中の患者には腹部の発赤・硬結や掻痒の有無を確認し、特に他メーカー・他種類のインスリンへの変更時にはこのような局所症状に注意を払う必要がある。また、抗体により血糖が非常に不安定になり低血糖を頻発する症例があるため、頻回の SMBG 施行の必要性の説明と低血糖に対する教育を繰り返し行う必要がある。